

EFL グループ相互行為内での Academic Discourse Socialization

—大学グローバル教育プログラムにおける言語学的エスノグラフィー研究から—

抽冬紘和（関西大学大学院生）

1. はじめに

本研究は、大学グローバル教育プログラムにおける、留学生、日本人学生からなるクラスルーム、グループ内での言語社会化 (e. g., Ochs and Schieffelin, 2012) に関するエスノグラフィー研究より、異文化間 EFL グループ相互行為内での、学習者の academic discourse socialization (Kobayashi, Zappa-Hollman, and Duff, 2017) の過程、学習者に必要とされるグループディスカッション参加に必要な communicative competence (Hymes, 1972) としての能力習得に関するエスノグラフィック的観察、分析をおこなった。

2. アカデミック社会化 (Academic discourse socialization)

アカデミック社会化 (Academic discourse socialization) は学習者がどのようにアカデミックコンテキストにおいて有能な参加者となるかを研究する分野である。Kobayashi, Zappa-hollman & Duff よるとアカデミック社会化は “the social, cognitive, and cultural processes, ideologies, and practice involved in higher education” に特に焦点をあてると述べている。(p. 239). おもに海外の英語を第一言語とする圏内の大学教育において、留学生の第二言語習得と合わせて、アカデミックコンテキストにいかにか社会化されるかの研究がオーラルコミュニケーション、プレゼンテーション能力に焦点を当て、おこなわれている (Morita, 2000, 2004). また、Zappa-Hollman (2007) によると 英語非母語話者のオーラルコミュニケーションでの成功は “not only that students possess high levels of language proficiency but also that they have a good understanding of the rules and specific behaviours valued by each discipline and each institutional context” (p. 456) とされている。しかし、発表者の知る限りでは、グループディスカッションでの事例、また、国内でのこのような枠組みでの研究は多く見られない。

3. エスノグラフィックフィールドワーク

3.1 フィールド

発表者は 2014 年に国内の私立大学におけるグローバル・異文化教育プログラムにおいて、エスノグラフィックフィールドワークを行った。このプログラムは留学生、日本人学生が参加するプログラムで、グローバル社会で活躍する人材を育成するためのものである。授業の進行方法は原則的に英語使用のみで行われた。授業内で 6 つのグループにプレテストの成績順で分けられ、上級レベル 2 グループ、中級 2 グループ、初級 2 グループとなる。上級 2 グループと中級 1 グループにはアメリカ人の留学生はグループアシスタント (TA) として参加し、他の 3 グループには、日本人、中国人の大学院生がグループアシスタントとして参加した。また、発表者も TA として参加し、研究観察も行った。

3.2 フィードワーク参加者

観察研究対象にしたグループの構成は、上級レベルグループで、Andrew (アメリカ人留学生アシスタント)、Ohzora (日本人学生)、Rachmad (インドネシア人留学生)、Charlee (タイ人留学生)である。Ohzoraはこのプログラムが行われていた大学の学生である。このグループはもっとも、英語でのコミュニケーションが出来、また、インタラクティブな特徴があった。

3.3 データ・分析

本研究発表で使用するデータは、プログラムの概要、参加者のインタビュー、そして、グループディスカッションの音声データである。プログラムの概要は、このプログラムの計画、達成目標が述べられており、参加者のインタビューでは参加者の経験を調査し、また、グループディスカッションでは実際のグループ内での英語、コミュニケーション学習の実践を分析した。エスノグラフィーの手法に従い、Agar が述べる” rich point” (1996)、調査観察者にとって未経験の事象、予期せぬ発見、をもとに分析ポイントを設定し、データ分析を行った。本研究発表では、コース概要内で、学習者に求められている事項、日本人学生 Ohzora のインタビュー時の発言、また、グループディスカッションでの参加者たちの Translanguaging (García & Li Wei, 2014) を分析した。

4. 結果と分析

次のスキルが本研究のアカデミックディスコース参加には求められ、コミュニケーション能力とされることが分かった。1) グループに参加する (Participating in the group), 2) グループ内の出来事を観察する (Observing the group events), 3) グループで何をすべきかを知る (Knowing what to do for the group), 4) グループ中心となる (Being centered in the group), 5) グループ内で共通の言語レパートリーを状況に応じて使い分ける (Ability to use their linguistic repertoires according to the situation). これらの能力 1) から 4) は段階的に習得され、学習者のアカデミック社会化の過程が見られた。しかし、5) 言語レパートリーの使用に関しては、段階的発達としてではなく、1) から 4) とコミュニケーション能力が発達していく過程でのコミュニケーション能力であるということがわかった。Extract 1 は、グローバル教育のカリキュラムの概要からの引用である。

Extract 1. Curriculum: Overall Introduction

Starting in 2014–2015, xxxx University has launched a new curriculum for international students and Japanese students who wish to develop their intercultural competence.

Extract 1 ではこのカリキュラムの学生の目標の一つとして、異文化相互行為のための能力 (intercultural competence) を高める必要性を述べている。また以下の Extract 2 は特に、学生たちの学習目標として、その異文化相互行為のための能力の詳細が述べられている。

Extract 2. Program Aim (Intercultural Competence)

The xxxx curriculum aims to nurture a combination of attitudes, knowledge, understanding and skills necessary for students to understand and respect people from different cultural backgrounds, and how to respond appropriately and effectively when interacting and communicating with them. Good communication skills in a foreign language (e. g., English) is vital for such competency, and this is an important focus of the curriculum on offer.

Extract 2 では、異文化間相互行為に必要な能力の具体的な定義が述べられ、その能力を持って異文化間相互行為を成すためには外国語、英語技術、能力の必要性が求められている。このように、授業内での学生の学習目標、学生が習得を目指すコミュニケーション能力が記されている。またこれらの学習目標の要素は、この授業内、特にグループディスカッションに参加するための、学生にとっての習得を目指す必須能力といえる。

本稿のスペースの都合上、学生の語用論的能力の発達段階を示す Extract は本稿では省略するが、Extract 6において、学生たちの、Academic competence の一つである言語レパートリーの使用と、それによるグループ内相互行為の達成を見てみる。学生たちは遺伝子組み換えのペットへの意見を話し合っている。

Extract 6

22. Ozora: Maybe yes ↓
23. Andrew: Maybe yes ↑ Maybe yes ↓ Why maybe yes ↑
24. Ozora: Ah (...) it' s interesting but ah (...)
25. Charlee: You want to eat it ↑
26. Andrew: xxx
27. Ozora: It' s (...) not (...) not too (...) dotoku (...)
[Ethical (...)]
28. Andrew: Dotoku ↑
[Ethical ↑]
29. Ozora: Dotoku (...) dotoku tte nante iun desu ka ↑ ((To the lecturer beside the group))
Ethical (...) What do you say in English ↑]
30. Rachmad: Wakaran (...)
[I don' t know]
31. Ozora: Dotoku tte (...)
[Ethical (...) what ↑]
32. Lecturer: Ethically::: you find that ↑ Ethically:::xxx
33. Andrew: O:::K::: Dotoku (...)
34. Ozora: Dotoku ↓
35. Andrew: Ethical (...) Yes ↑

Extract 6 は グループ内での、translanguaging によって、グループ内相互行為、つまり、グループアイデアの構築が達成されている場面である。行 23 で Andrew は Ozora の意見(遺伝子組み換えの魚への賛同) の理由をのべるように促している。行 24 で Ozora は理由を探そうとするが、アイデアをはっきりと英語で表現することができない。その内容を行 27 で、 “It' s (...) not (...) not too (...) dotoku (...)” と答え、道徳” を英語で表現できないことを伝えている。Andrew はこの日本語の意味を英語では理解できないようで、行 38 では日本語で聞き返している。 このため Ozora

は日本語で講義担当者に質問している(行 29、31)。その間、Rachmad も道德の意味を知らないと表している(行 30)。講義担当者の返答のあと、グループ全体は“道德”の英語“ethical”学ぶと同時に、グループでのアイデアとして、遣伝子組み換えは道德的に問題であると、完結している。

5. 結論

グローバル教育のプログラムにおいて、異文化間相互行為能力と英語(を含む言語レパートリーの)使用が学習者の習得目標とされている。学生たちは、アカデミックコミュニティへの社会化を、グループ相互行為での実践的学習を通してそれらの目標事項を習得する。

謝辞 本稿のための研究、執筆にあたって Fred E. Anderson 氏, Meryl Siegal 氏から有益な指導、コメントを頂いた。ここに感謝する。また、フィールドワークの機会を与えてくださった、授業担当者、観察に協力してくれた学生たちにも感謝したい

参考文献

- Agar, M. (1996). *The Professional stranger. 2nd Edition*. US: Academic Press.
- Garcia, O., & Li Wei. (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism, and education*. New York: Palgrave Macmillan.
- Hymes, D.H. (1972). On communicative competence. In J.B. Pride & J. Holmes (Eds.), *Sociolinguistics* (pp. 269-293). London: Penguin.
- Kobayashi, M., Zappa-Hollman, S., & Duff, P. A. (2017). Academic discourse socialization. In P. A. Duff & S. May (Ed.), *Language socialization 3rd edition* (pp. 239-254).
- Morita, N. (2000). Discourse socialization through oral classroom activities in a TESL graduate program. *TESOL Quarterly*, 34 (2), 279- 310.
- Morita, N. (2004). Negotiating participation and identity in second language academic communities. *TESOL Quarterly*, 38 (4), 573- 603.
- Ochs, E. & Schieffelin, B. B. (2012). The theory of language socialization. In Duranti, Alessandro, Ochs, Elinor & Schieffelin, Bambi (Eds.), *The Handbook of language socialization* (pp. 1-21). Chichester: Wiley-Blackwell.
- Zappa-Hollman, S. (2007). Academic presentations across post-secondary contexts: The discourse socialization of non-native English speakers. *Canadian Modern Language Review*, 63 (4), 455-485.